

エルサルバドル共和国における一村一品運動の取組み ー地域ブランド創造を通じた地域経済活性化

内河 友規

エルサルバドルの政経・社会情勢・背景と課題

中米の北端グアテマラに隣接するエルサルバドルは、人口634万人を擁し面積は21千km²(九州の約半分)と中米域内でも最小の国である。1970年代から90年代にかけて13年にも及ぶ内戦の後、1992年の和平合意を経て、現在は「ファラブンド・マルティ民族解放戦線(FMLN)」が二期にわたる政権運営を担う。当国の産業構造は、繊維産業等の軽工業とコーヒー、砂糖キビ等の農業一次産品生産に偏っており、産業構造の多様化が必要とされる。マクロ経済指標では、2016年世銀レポートによるとGDPが26,797百万米ドル、1人当たりGNIが3,920ドル、経済成長率は2.4%に留まる一方、当国経済省によると2016年の失業率は7%に達しており、近年高い経済成長が謳われる域内近隣国のコスタリカ、パナマと比較すると経済の脆弱性が指摘されている。

当国の小零細企業振興を担う政府機関「エルサルバドル小零細企業庁(CONAMYPE)」の2016年次報告によれば、産業全体に占める小零細企業(MSE)への就労割合が99.34%にも達し、70万人の雇用を継続的に創出するにもかかわらず、GDPでは全体の35%を担うに過ぎない。

また内戦時より、特に戦禍の影響濃い国内東部地域から労働人口が米国へ大量に流出し、当国在米大使館によれば現在まで約300万人とされる移民が発生した。内戦終結後も経済の停滞と雇用及び治安の不安定化を受けて移民の流れが続く中で、2016年世界銀行推計では移民による国内送金はGDPの17.1%をも占め、当国経済を支える基盤となっている。

長期にわたる内戦により地域住民同士による衝突や相互監視状態も生じ、本来当国に根付いていたコミュニティへの帰属意識や相互信頼感、自尊心は大きく毀損されたとされる。また内戦終結後も、政策的に首都圏や大都市が重点的に開発され、地方の経済開発が取り残されたため、地域の地場産業は育成されず、結果、上述した若年労働者層の米国や都市部への流出・移動を促し、地域経済の衰退とそれにとまなう過疎化が生

じることとなった。

上記課題に向けた解決策模索と対応

同課題を受けて2002年より04年まで、国際協力機構(JICA)は当時の政権と「エルサルバドル国経済開発調査」を実施、東部地域を対象とするマスタープランを策定、その課題把握と解決策の一つとして、大分県を発祥とする一村一品運動(OVOP)を紹介した。その後、政権交代を受けた2009年、現政権によってあらためてOVOPの概念が着目され、2010年にはOVOPを国家開発5か年計画に採用、CONAMYPEがその実施を担うことが決定された。

開始当初から現在に至るまで、JICAによる専門家やボランティア派遣、本邦研修等の継続的な協力もあり、現在、国内80余りの市町村がOVOP事業に取組み、地域住民による地域資源の発掘と付加価値化を通じて、市場の開拓と地場産業振興の一端を担うに至っている。

OVOPは現在、世界でもアジア、アフリカを中心に30余国で実践され、ラテンアメリカ(中南米)でもグアテマラやコロンビア、コスタリカ等で積極的に取組まれている。他国と比較しても進捗著しいとされるエルサルバドルOVOPの特徴としては以下が挙げられる。

まず制度・体制面では、OVOP実践の優先化から2015年CONAMYPE内に「OVOP局」が設置、専属職員も配置され、その翌年には「OVOP国家政策」も立案・公布されるなど、OVOPの全国的な展開を目指す現政権の、高い政策的コミットメントが示される。

また地域においては、生産者が一同に介しOVOP運営委員会を形成、OVOP事業を運営するなど住民や生産者の組織化と主体性形成が図られることも特徴的である。(写真1)

このように日本発祥OVOPの基本概念である「地域資源を活用した地場産業振興」を踏まえつつも、当国OVOPは個々の企業・産業育成ではなく、地域コ



写真1：市OVOP委員会によるアンテナショップ開店式（執筆者撮影）

コミュニティ全体の開発を目指し、その結果として内戦時代に失われたコミュニティ意識の再醸成と住民の自尊心回復、相互信頼関係の再構築にも寄与することとなった。この点が最大の特徴であろう。

ゆえに当国OVOP事業の実践をアドバイザー支援する執筆者は、過去アフリカや近隣国OVOPを支援した経験との比較分析を行う中で、当国OVOPは、必ずしも大分県の一村一品運動と同義の開発目標・手法を共有するものではないと考える。当国では「多様な地域資源」の発掘・活用による付加価値創出を通じた「地域ブランド」化を短期的な目標と捉え、産品のみならず「地域全体」の差別化・ブランド化を市場に訴求し、その波及効果で地場産品の販路開拓・拡大に導くことを目指す。この経済インパクトとして、OVOP全体の純益は前年度比で74.6%、個人平均でも59%の増加を達成した。（図1）

このように地域全体のブランド波及を通じて、地域由来の産品が市場で受け入れられ、販売を伸ばすことで、中期的には、それまで市場及び社会からの疎外感を有していた地域生産者が自尊心を回復し、帰属地域

へのアイデンティティを再確立することが期待される。また自尊心回復と同時に品質管理の責任感や新商品開発への積極性が生じ、さらなる市場拡大を果たす等、地場産業振興での正のスパイラルが生じることを中長期的な目標とする。

このように地域ブランド化を通じて地場産品の市場開拓・拡大を図る中で、当国OVOPは必ずしも「地域資源」を原材料やその加工品（モノ）のみに制約せず、人材、風土、歴史、文化、環境等も資源（コト）として積極的に活用する。また地域での実施主体も、老若男女問わず様々な社会的階層を受入れる要素を持つ。その多様な受容性から、上述の通り当国OVOPは若年層の雇用創出や女性の起業家、社会進出を促すなど、社会的包摂のインパクトも導出するに至った。（図2）当初から明示的な開発目標として意図したものではないが、長期的かつ副次的な効果として、当国OVOPが経済面のみならず社会包摂面でのインパクトを実現したことも重要な特徴として挙げたい。

OVOP実施世代の変遷と今後の展望

大分県での先行事例を検証するにOVOPの実施主体は4段階の変遷を経たと考える。即ちその基本コンセプトの理解と普及、実践の促進を担った政府・自治体をゼロ世代と捉える。その後、同コンセプト啓蒙を受け実践に取り組んだのは、多くが大分県出身者でその地に根付いた（都会に流出しなかった）住民・生産者であり、OVOPの草創期を担った第一世代である。第一世代が政府の支援を受けつつ産品の多様化、品質改良、PRに取り組む中で、地場産品（モノ）の品質価値を高め、市場需要を掘り起こした。地域資源の付加価値化にこだわり、一次、二次、三次産業の複合的要素を持つ事業展開、いわゆる「六次産業化」に着目したのが第一世代の特徴である。この発想は米国

図1：OVOP全グループ純益総額（\$）とOVOP生産者一人当たり純益額（\$）

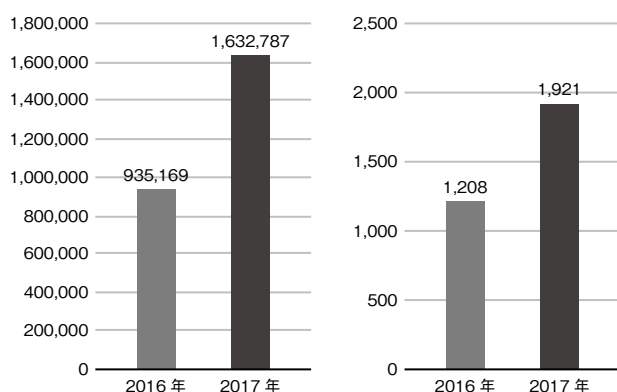
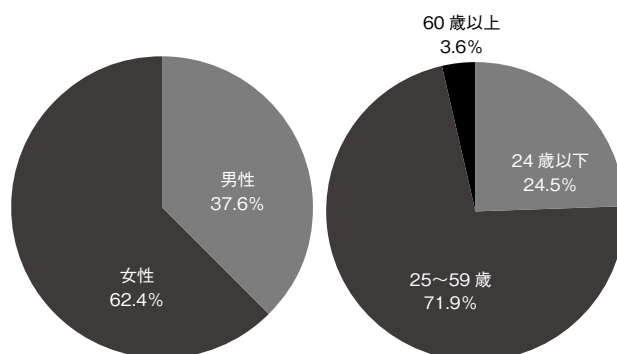


図2：OVOP参加者男女比率とOVOP参加者年齢層比率



で同時期に推奨されたバリューチェーンと同義であり、OVOPは「地域内発型バリューチェーン」構築手法と定義出来よう。

ただ、この時点では産品（モノ）の付加価値化を重視し、町全体や住民自身の魅力発掘を通じた地域全体のブランド化までは図っていない。大企業の誘致等と合わせて、地場産品の市場開拓・拡大を通じて特定地場産業の振興を導き、地域雇用創出を促すなど従来型の地域経済開発手法であったとも言える。しかしこれら事業は都市に進学や雇用を求めて流出した地域出身者へのUターン機運を促し、結果大分県のOVOPに新たな風を巻き起こすきっかけとなる。即ち都市部からのUターン住民が中心となり、地域の伝統や歴史、文化、人材をも含有した町全体の魅力を高める活動・事業が生じた（第二世代の形成）のである。

2000年代初め、大分県別府市では県の「人づくり」研修を受けたUターン住民が中心となり、「オンパク（温泉博覧会）」事業が開発・実践された。同事業では、温泉のPRに終始せず、多様な地域資源の現場を住民自身が訪れ追体験し生産者と交流することで、隠れた資源の価値再発見と市場開拓に結び付けた。これは現在流行の「モノからコト」への地域経済開発のパラダイムシフトを先行的にモデル化したものである。オンパクはOVOPに無かった明確かつ簡便なマニュアル策定を経て、OVOP以上に全国へ普及するに至った。

このOVOP第一世代からオンパク第二世代への世代変遷を経て、モノのみならず町全体の魅力が高まると、その町に居住し働くことを希望する外部者が現れるのは必然である。2010年代、別府市の新たな魅力に触れた県外からのIターン住民が中心となり「Beppu Project」（NGO）を組織化、オンパクの発展形として「大分」そのものをブランド化する「OITA MADE」プロジェクトを設立した。このOVOP第三世代の取組みと言える同事業は、文字通り大分県産品の開発PRに努めつつ、モノのみならず生産者や産地の歴史・文化的背景、環境や風景をも売りにする。つまりOVOPやオンパクにより種を蒔かれ培われた地域「ブランド」と言う果実（市場価値）を、OITA MADEが市場に問い販路拡大に導いたのである。この四世代に渡る主体変遷が大分県では生じており、様々なアクターの巻き込みと資源の多様化を促すダイナミズムこそが一村一品運動を『運動』足らしめるものであった。

振り返って当国OVOPに目を向けると、現状はゼロ世代から第一世代に至る時点である。

JICAの協力を通じて、現在モノの品質向上や付加価値創造のみならず、地域全体の魅力づくり事業であるオンパクにも取り組む町が出て来た。（写真2）各地域のブランドが形成される中で地場産業の育成と雇用も創出し、都市部や米国への移住者のUターンも徐々にではあるが生じている。今後、出身者以外の移住（Iターン）導出の可能性も高まろう。

バリューチェーンの出口たる「市場」開拓の点で特筆すべきは、米国への移住者が、郷愁から当国産品に高いニーズを持つことにある。この所謂ノスタルジックマーケットは、移住人口が多く国内消費者と比較すると所得水準が高いこと、大量生産品にはない生産地や生産者の顔が見える産品を求めるなど、OVOPが作る付加価値や目指す市場との高い親和性を示す。既に移住者向け市場調査や産品PRも行っており、高い関心と反応を得ている。また将来は移住者が故国を再訪するディアスポラツーリズムとの協働も図れよう。

さらに国内市場に向けても、都市向けPRを目指す「アンテナショップ」や「地産地消」型販路開拓手法である「道の駅」等、日本発祥の産直PR手法も積極的に取組まれている。

これら事業を通じて第二世代が生じ、地域の魅力が他地域にも伝わることでブランド化と新たな人の流



写真2：全国各地で作成されたオンパクガイドブック（執筆撮影）

れ、即ち「OVOP第三世代」が生まれることも遠い夢の話ではあるまい。

大分県で産声を上げたOVOPが当国で発展し、真の『運動』となることを切に期待する。

（うちかわ ともり 国際協力機構（JICA）技術協力専門家、一村一品運動（OVOP）アドバイザー）



『ポーラースター ゲバラ漂流』

海堂 尊 文藝春秋

2017 年 10 月 510 頁 1,850 円+税 ISBN978-4-16-390729-1

前作『ポーラースター ―ゲバラ覚醒』(2016 年 6 月刊。本誌 2016/17 年冬号で紹介)の続編。ぼく(エルネスト・ゲバラ)はブエノスアイレスを発ち、1952 年 4 月にボリビアのラパスでパス=エステンソロ(後に大統領)、シレス=スアソ等によるボリビア革命の光と影を見た後ペルーへ入る。リマでコロンビア大使館に亡命中のアプラ党(アメリカ革命人民同盟)アヤ=デラト=レ党首と会い話していくうちにグアテマラ行きを薦められる。まずエクアドルへ向かい、グアヤキルから船でパナマ運河を通過しコロンで下船するが、熱帯地域での特殊部隊要員・諜報員を養成する米租借地にある米州学校へ連れていかれ、トリホス少尉(後の国家警備隊最高司令官、パナマの真の独立を目指し運河返還を実現する)と副官のノリエガ(CIA との二重スパイ、後に独裁者となるが米国の侵攻で犯罪者にされる)から 3 か月間軍事訓練を受ける。卒業後軍備を放棄して永世中立国を宣言したコスタリカに行き、フィゲレス大統領夫人のサロンに出入りし、ここで初めてキューバで武装蜂起し失敗して捕らえられたフィデル・カストロの事を知る。ベタンクール元ベネズエラ大統領にも会い、彼から別れの時に「またな、チェ・ゲバラ」と声をかけられ、チェ・ゲバラとしてコスタリカを離れニカラグアに入国する。ここでは米国海兵隊の侵攻に抵抗したサンディーノを討伐したソモサ親子の独裁ぶりと抑圧を目の当たりにする。次いでホンジュラス、エルサルバドルを通りついにグアテマラに到達する。市民病院の仕事に就き、アルベンス大統領のユナイテッド・フルーツを敵に回した農地改革に対する米国の反撃が始まり、アルベンスは辞任に追い込まれ、軍人による抑圧の政治に戻る。ぼくは、カストロに会うことになるメキシコに渡る。

300 冊近いラテンアメリカ関係邦文図書・文献を駆使して、ラテンアメリカ現代史に登場する有名な政治家、文学者、軍人などを些かご都合主義的であるが綺羅星の如く登場させ、登場人物に往訪国の近現代史の蘊蓄を語らせ、ゲバラの旅路を辿ることで、中南米の国々の当時の事情とキューバ革命前夜の国際情勢への理解を深めさせながら一気に読ませる。

(桜井 敏浩)



『ヒストリア』

池永 永一 角川書店

2017 年 8 月 630 頁 1,900 円+税 ISBN978-4-04-103465-1

沖縄の歴史や伝承を舞台にした物語りの作家による中南米を舞台にした壮大な小説。1945 年米軍が上陸した沖縄戦の衝撃でマプイ(魂)を失った若い女性 知花煉(ちばな れん)が終戦後ボリビアに移民し、東部平原地帯のサンタクルス市の近くで密林の開拓に挑み、生活の糧を得るために様々な仕事をこなす過程で日系人や先住民等の知己を得、他方で敗戦したドイツを逃れて潜伏する元ナチスの高官と関わりをもつようになるが、時に自身のマプイと肉体が別々に利害を異にしてぶつかり合う行動を取ることから窮地に陥ることもある。オキナワ移住地の開拓や地元民との軋轢、コカの栽培とコカイン密輸、ボリビア旅行中のチェ・ゲバラとの恋、後年のゲバラのボリビアでの革命を目指すゲリラ戦の開始、果ては米国から強奪した核ミサイルのキューバ持ち込みとキューバ危機に至るまで、東西冷戦時代を背景にいささかご都合主義と言えるほど現代史上の有名な人物が入れ替わり立ち替わり登場し、やや荒唐無稽なストーリー展開で煉と絡むが、最後はマプイと肉体の乖離も収斂して、一時帰国し米軍に大部分の農地を基地化された沖縄の現状に慟哭するところで終わっている。

著者の言わんとするのは、終わり無き戦争、そのための沖縄の基地の存続の糾弾にあるように思えるが、「第十一章私が愛した革命家」での煉とゲバラとのやり取りの中に、彼がボリビアで革命を起こそうとして失敗したのは、ゲバラの革命への理念とボリビアの農民たちがまったく噛み合わなかったことに敗因があるとの指摘は的を得ている。

(桜井 敏浩)